フロイトと世界観

井ノ川　清

はじめに

フロイトの著書「続精神分析入門」(Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse) の最終講（第35講）で，フロイトは「世界観というものについて（Über eine Weltanschauung)」という章題のもとに，「世界観」について真正面から取り上げ論じている。

フロイトが20世紀の人々に与えた影響は単に精神医学者たちに与えた影響に限定されてはいないことは明らかである。フロイト自身文化論，芸術論にまで手を伸ばしているのであり，彼が20世紀の思想家，文学者，芸術家たちに与えた影響は計り知れないほど大きい。従ってフロイトを純医学的に精神分析という観点から論ずることは，精神医学者たちに任せておけば良いのであるが，彼が「世界観」というものについて，彼の精神分析という観点から「科学的世界観」というものを打ち出して，他の世界観，即ち「宗教的世界観」と「マルクシズムの世界観」について論じている以上，われわれ精神文化の研究者が，これを無視するわけにはいかないであろう。まして現代において「宗教」の問題と「マルクシズム」の問題は依然として重要な問題である以上，フロイトのいう「科学的世界観」というものの実体は何であるかということ，さらに彼が考える「宗教的世界観」と「マルクシズムの世界観」というものはいかなるものなのか，ということを検討することはそれなりに意義あることと言われうるであろう。

以下にフロイトの「続精神分析入門」の最終講「世界観というものにつ

いて」を批判的に論じ，「世界観」に対するフロイトの思想を解明してみよう。

1. 科学的世界観

フロイトはまずはじめに「世界観」とは何かについて定義づけを行っている。

「私の考える世界観とは，われわれの現存在の一切の問題を，ある上位の一仮定から統一的に解決する知的構成物であり，従ってその中では未解決の問題は皆無であり，およそわれわれの関心を惹(ひ)くものはすべてその中にしかるべき位置を占めている底(てい)のものなのです。」(S.170)

フロイトが「世界観」をこのように定義づけるのは，彼がヘーゲル哲学の世界観や宗教的世界観のことを頭にいれているからである。そしてこの規定が世界観というものの性格であるなら，精神分析が上の定義にのっとったような世界観を形成することは全く分不相応なことであるから，精神分析は科学の世界観を採用しなくてはならないとフロイトは言う。

では「科学的世界観」とは何か。世界解釈の統一性ということは，科学的世界観も採用するが，それはただ綱領としてだけであって，その実現は将来へ延期されているとフロイトは言う。ここでフロイトが「世界解釈の統一性」を否定しなかったのは，彼が科学に万全の信頼を置いたからであって，たしかに科学は今のところまだ始まったばかりであるのでとても統一的世界観を持つなどということはできないが，もっと科学が進歩すれば将来は科学によってすべて解釈されうる，と考えているからに他ならない。

フロイトは科学の世界観の特徴を次のように定義づける。

「その時点において知りうること以外には出ないことと，自分に無縁のある種の要素をきっぱりと拒絶することがその特徴です。その主張するところに従えば，慎重に調べあげられた諸観察の知的加工，つまり研究と呼

ばれるもの以外に世界認識の源泉は存在せず，そこには啓示や直覚や予覚などによる知識の存在する余地はないのです。」(S.171)

この言説で明らかなように，フロイトは，「世界観」を「認識論」に限定づけて論じている。しかもその「認識」も「科学的認識」に制限している。「その時点において知りうること以外には出ないこと」というのは科学者の態度としては全く正しい。そして科学者ならば「その時点において知りえないこと」は研究によって次第に認識しうるようになると確信して知識を追求していけばよいであろう。しかし，人間はみなが科学者なのではない。必ずしも「知識」とか「理論」だとか「合理性」に最高の価値を置かない人たちも多くいるのである。彼ら大衆にとっては「知りえないこと」の多くの事象事物に取り囲まれて，世の荒波の中で生活していかなければならない以上，未知の事象にぶつかった時，そしてこの事象がまだ科学的に解明されていないような時に，科学者みたいに落ち着いて研究室に閉じこもって研究するわけにいかないのである。絶えずその時点その時点で決断と実行を強いられるのである。彼らは科学的認識を待っているわけにはいかないのである。従って彼らは各自の価値観に基いて判断し，決断し，行動するのである。この時或る者は感情に一番価値をおいて自分の感情に一番適している行動をとるだろうし，また或る者は自分の感覚に，さらにまた或る者は宗教的信仰生活に第一の価値を置いて実践の次元で諸事象に対していくのである。不治のがん病を宣告された患者に必要なのは科学的認識であろうか？彼はせめて安らかに心だけでも静かに死にたいと思うであろう。彼の心を落ち着かせるのはむしろ宗教かもしれないのだ。

さてここで宗教家が，人間の精神や心というものは自然科学的研究方法によっては解明されえないものであるから精神分析がこれを研究しようとするのは越権行為であると言って精神分析を拒否しようとするなら，もちろんこの宗教家の態度はまちがっているだろう。精神分析は自らの研究方法にもとづいて人間の心を研究対象にしてどこまでも研究を追求していっ

て良いのである。彼ら研究者が楽天的に願望しているように，いつの日か人間の精神領域も全く自然科学的に解明できる日がくると考えるのを批判する必要はないのである。ただこの際精神分析が忘れてならないのは，科学的認識はその時々のかなり歴史的に相対的な認識であるということ，またそれが把握解明しえない部分が常に存在するということ，それは或る対象についてそれの絶対的全面的最終的認識を手に入れているのではないということである。しかし一般大衆は日々の生活の上で絶えず絶対的行動を迫られているのである。彼は認識していなくても，実践の次元で決断を要求されるのである。まだ合理的思考が判断を下しえない領域や未知の部分にぶつかった時でも，まだ私は科学的認識を持っていませんから一寸待って下さい，と言うわけにはいかないのである。実践的行為というものは絶対性を帯びたものである。彼は行為を決断しなければならない。何に基づいてか？或る者は信念に基づいて，また或る者はおのれの人生観に基づいて，さらに或る者は信仰に基づいて。大事なことはこの際何ら自らの自由意志に基づかないで単に状況の圧迫によってやむを得ず惰性的に行動してしまうことだってありうるし，いやこの場合がかなり多いだろうということなのである。人間は必ずしも合理的思考にのみ基づいて行動するのではない。合理的思考に基づいて行動する人間の方が実は少数なのである。「愛」「自己犠牲」「献身」といったものは合理的思考に基づくものであろうか？これらは合理的思考に基づいていないからといって人間にとってそれだけ価値が無いものであろうか？

フロイトの唱導する世界観は「科学者」の世界観である。しかし一般大衆もみな多かれ少かれ「世界観」を必要としている。彼らは「科学的認識」というよりは，彼らに理解できる世界観，即ち実践的に妥当する世界観を必要とする。無知蒙昧と笑われても彼らは彼らの魂や心情に訴える世界観を必要とする。この故に彼らは「宗教的世界観」をよしとするのである。

2. 宗教的世界観

「科学と地盤を争うことのできる三つの勢力のうち，手強い敵は宗教だけです。」(S.173)

三つの勢力とは，宗教，芸術，哲学のことである。芸術は錯覚以外の何物でもないし，現実の国に干渉しようとはしないので無害であるとフロイトは言う。哲学は部分的には科学と同じ方法によって仕事をするが，首尾一貫した世界像を追求するとき，科学の進歩によって崩壊せざるをえないし，さらに哲学は少数者の関心を惹くだけであるとフロイトは断ずる。

「これに反して宗教というものは，人間の最も強烈な情動を思いのままに動かす一つの巨大な力なのです。」(S.173)

宗教には三つの機能があるとフロイトは言う。第一の機能は，人間の知識欲を満足させ，科学と競合する。第二の機能は，人生の危険や有為転変に対する人間の不安をなだめ，不幸に際しては慰めを与える。科学はこの点で宗教と張り合うことはできない。フロイトは宗教は人間にとって強力な救いの女神であると言うが同時に，「しかし，宗教は人間を苦しむがままに任せなくてはならず，ただ忍従するようにと勧めるにすぎないのです。」(S.174) と言う。このフロイトの宗教観がフロイトの宗教的知識の狭さを如実に表わしていることは誰しも否定できないであろう。第三の機能は，掟を掲げ，禁止と制限を申し渡すことであり，科学から最も遠ざかる。

「宗教の中になぜ奇妙にも知識と慰藉と要求とが共存しているか，これは宗教というものを成立史的に分析してみる時にはじめて理解されます。」(S.175)

フロイトは宗教の宇宙発生論を分析する。この場合，世界創造者はいつもただ一人の男性神であり，これは人間によって「父」と呼ばれる。

「宗教的な人間は，世界の創造というものを自分自身の発生と同じよう

に想像する。」(S.175)

こうなるとあとはフロイトの独壇場になる。フロイトは言う。人間はかよわい，頼りない幼児期，父親の保護と監視の中で成長した，そして大人になっても生活の危険に対して，自分を幼児期と同じように考え保護を求める。人間はこの幼児期の，過大評価していた父親の記憶像に立ちもどり，これを神的存在に高めて現在の中へ据え置くのである。

「この記憶像の情動強度と保護を必要とする状態の持続とが両々相俟って神に対する彼の信仰を支えているのです。」(S.176)

宗教のいう倫理的要求もこの幼児期状況の中に組み込まれている。父親は子供にしていいことと悪いこととを教え，欲動願望を制限するように命令する。愛の賞与と懲罰という体系によって，子供は自分の社会的義務をわきまえるように教育される。人間はこの事情をそのまま宗教の中へ持ち込む。

「両親から発せられる禁止と要求は，道徳的良心として子供の胸の中に生き続けます。報賞と刑罰という同じ体系の助けを借りて神は人間界を統治します。」(S.177)

つまりフロイトの「宗教的世界観」に対する命題は，「宗教的世界観というものを根本において規定しているのは，われわれの幼児期の状況である」というものである。

そしてこのような宗教は，科学が宗教を一個の人間的事柄のように取り扱い，批判的検討を加えるやひとたまりもなかったとフロイトは勝ち誇る。フロイトが宗教を批判するのは宗教の幼児性，無知蒙昧さ（例えば奇蹟への信仰）に対してである。これはたしかに科学によって克服される。しかし宗教の内容はそれだけのものであろうか？フロイトが「宗教の教えは，それらの教えが生じた時代，つまり人類の無知な幼年時代のものなのです。」(S.181) と言って宗教を規定するとき，これが「精神分析」によってなされた解釈であることは明白である。フロイト自身次のように述べ

ている。

「宗教的世界観に対する批判の最後の仕上げを行ったのは精神分析でした。精神分析は宗教が幼児の無力な頼りなさから出てきたものであることを指摘し，成人の生活の中へ持ち続けられた幼児期の願望と欲求から宗教の内容を説明したのです。」（S.180 f.）

このような説明ではとても仏教を解明することにはならないであろう。もっともフロイト自身「私は私の論究を厳密に言えば宗教の一つの形態，つまり西洋諸民族の宗教だけに限ったのです。」（S.182）と言っている。

フロイトは宗教が，科学が人間の精神や心を研究するのは科学の僭越である，といって科学を拒否するときは，怒ってこれを批判する。しかし科学はありとあらゆる領域を研究対象にしてよいのだと主張する。宗教の領域への科学的精神の干渉は無条件に認められなければならないが，科学的思考の領分への宗教の干渉は断固拒否するのである。ここでフロイトが科学的思考をどのように考えているかをみてみよう。

「科学的精神は現実との一致に到達することを志向します。……このような現実的外界との一致をわれわれは真理と呼びます。真理はあくまで科学的研究の目標なのです。」（S.184）

ここでフロイトが真理と言っているのは認識論的真理のことである。人間の心にとっての「真実」というようなものは思考から拒否される。かつて宗教が独善におちいっていた排他性に科学がとって代る。

「真理は寛容でありえず，いかなる妥協も譲歩も許さず，科学的研究は人間活動の一切の領域を自分の領域とみなし，ある他の勢力がその一部分を自分のものとして勝手に差し押えようとしますと，容赦なく批判的にならざるをえないのです。」（S.173）

この科学者たちの「真理」への情熱が原子爆弾まで作らしたのである。さらにフロイトはかつての宗教が用いた一種のおどかしを語る。

「科学の適用を軽蔑する者はその身を禍いにさらすと科学は言うので

す。」(S.175)

フロイトの科学的思考への全面的信頼は，19世紀の時代潮流，即ち科学的実証主義の時代潮流の線上にフロイトも位置しているということを示しているということができよう。

「知性——科学精神，理性——がやがては人間の精神生活における独裁権を獲得する日がくるであろうということは，われわれの最善の未来の希望なのです。」(S.185)

合理的思考に対するこの楽観的見解をフロイトは次の言葉でしめくくる。

「科学は予想もされなかったような完全化の道をたどることが可能ですが，宗教的世界観にはそれができないのです。……宗教は錯覚であり，われわれの欲動願望の動きに迎合することによってその強さを手に入れているのです。」(S.189)

科学者が合理主義的思考を尊重するのを否定する者はいないであろう。しかし一般大衆の行動は欲動願望に基づいている場合の方が多いのではないだろうか？フロイトが登場した時代は科学の発生期確立期の時代であったのであり，科学は宗教からの激しい攻撃の中で自らの存在領域を守るに県命であった。従ってフロイトが宗教というものに敵意を感じていたことは容易に推測できるのである。しかし，現代はやゝ局面が変ってきている。科学技術はいまや独裁者となってありとあらゆる領域に干渉し科学的認識を誇っている。今日ではもはや科学の方が，かっての宗教と同じようになりつつある。科学は人間の価値観の領域まで干渉してくる。しかし合理的思考より美しいものに憧がれ，美的なものを自分の第一の価値あるものと考える人たちも多くいるのである。美や崇高なるものを追求してこれとともに没落して本望であると考える人たちに対して科学は何をなしうるか？人間の心の内的真実を科学的認識より価値あるものと思う人たちに妥当するような領域——科学の領域とは違うもの——を認める必要があるの

ではないのか。フロイトは宗教の危険性を強く感じていたが，科学の危険性については少しの危惧の念も抱いていなかった。科学に対する絶対的楽天的な信頼感が彼の宗教であったのだ。

3. マルクシズムの世界観

「社会の経済的構造と，人間生活の全領域に及ぶさまざまの経済形態の影響とに関するカール・マルクスの研究は，現代において揺ぎない権威を獲得するに至っています。」(S.191)

フロイトは現代におけるマルクシズムの影響の大きさは十分承知している。しかしまた「マルクスの理論の中で，社会形態の発展は自然史的過程であるとか，社会層の変遷は弁証法的過程を通じて次々と起ってくるなどという命題にはついて行かれませんでした。」(S.191) とも言っている。この見解は一面においては正しいといって良いだろう。つまり，人間の歴史は自然法則と同じ法則にのっとって，原始共産主義社会から共産主義社会まで発展していくのであり，その発展形態は弁証法的である，というマルシズムの世界観は，当時の科学的実証主義の動向に沿ったものであるし，またヘーゲル哲学の沈澱物でもあるからである。フロイトは人間の歴史には自然法則は見い出され得ないと言う。また歴史発展の動力は階級斗争ではなく，人間の自然力の支配が進行して，これが人間の社会的諸関係に影響を及ぼしたとも言う。即ち騎士道と貴族政治を解体させたのは火薬と火器の発明によると考える。さらに第一次世界大戦も人間の「自然に対する最後の偉大な勝利である空の征服」に対する代償であると言う。即ちフロイトは歴史発展の動力を階級斗争よりは科学技術の発展に求めるのである。人間と自然支配との関係は必然的に人間の経済制度にも影響を与えると考えるのである。

フロイトはマルクスの『経済学批判序説』の中で公式化されている「下部構造が上部構造を決定する」というあの有名なテーゼを部分的には認め

ている。

「マルクス主義の強みは明らかに，歴史の把握とそれにもとづいた未来の予言にあるのではなく，人間の経済的諸関係が人間の知的，倫理的，芸術的態度に及ぼすところの，避けうべからざる影響を鋭く指摘した点にあるのです。それによって従来ほとんど完全に誤解されてきた数々の因果関係や依存関係の正体が暴露されたのです。しかし経済的動因が社会における人間の行動を決定する唯一の動因であると考えるわけには行きません。」(S.193)

いわゆる上部構造は単に下部構造の直接的反映体にすぎないし，また人間は単に外的環境にのみ影響を受けるという公式は今日では殆ど否定されているといって良いだろう。

「生きている人間の反応が問題である場合に，なぜ心理的因子を無視することができるのか，そもそも理解に苦しみます。」(S.193)

この心理的因子としてフロイトは，「自己の根源的な欲動の動き，つまり自己保存欲動，攻撃欲，性愛欲求，快感獲得と不快回避の衝動」といったものを挙げている。人間はたしかに外的状況から影響を受けるのであるが，同一の経済関係の中にあっても人間の行動が多様であることを考えると，たしかに精神の自律性，人間の主体性といったものは認められると言って良いだろう。フロイトはこの上部構造の自律性について，文化発展の自律性ということを言う。

「この文化発展の過程はたしかに他のあらゆる因子に影響を受けはしますが，しかしその起源においてはそれらの因子に左右されないことは確かであって，それはある有機的過程に比較できます。おそらく自分のほうから他の諸契機に影響を及ぼすことが可能なのです。」(S.194)

フロイトはマルクシズムの欠落部分をマルクシズムが補足するならマルクシズムはほんとうの社会学になると言う。以上に述べたフロイトのマルクシズム観は今日ほぼ認められてきているといってよいだろう。さてロシ

アにおいて具体化されたボルシェヴィズムについてフロイトは完全に否定的である。

「……マルクス主義も結局はかっての宗教のそれとまったく同様に厳格な思考禁令を作り出したのです。マルクス主義的理論の批判的検討は禁じられており，その正当性を疑うことは，むかし異端がカトリック教会によって処罰されたように罰せられるのです。マルクスの著作は啓示の源泉として，聖書や回教経典の地位を占めるに至りました。」(S.195)

この見解は実際歴史的にスターリニズムに堕してしまったロシアのボルシェヴィズムに妥当するであろう。では一体人々はなぜあれほどマルクシズムに熱狂するのであろうか？フロイトはこれをマルクシズムの持つ錯覚のせいだと言う。

「マルクス主義は，わずか数世代のうちに人間の本性というものを変えてしまい，その結果新しい社会秩序の中でほとんど摩擦のない共同生活が営まれるようになり，人間は労働の任務を強制されずに引き受けるようになると見込んでいます。……しかし人間の本性がそのように変るということはまずありそうもないことです。」(S.195)

この見解が正しいか正しくないかを判断するにはもう少し時間が必要であろう。即ち，ソ連，東欧，中国，キューバー，ベトナム等々といった社会主義国が今後どうなってゆくかを今しばらく見る必要があるだろう。

さらにフロイトはマルクシズムのもつ幻想性が人々をマルクシズムに惹きつけるのだと言う。

「宗教と全く同じようにボルシェヴィズムもまたその信者に対して，現在の生活の悩みと不自由とを償うために，そこにはもはや満たされざる欲求は何一つとしてないというようなよりよき彼岸を約束せざるをえないのです。」(S.195 f.)

この言説から引き出せることは，人間は幻想によって熱狂的行動をするものであるということである。人間はみな心の奥底で理想を求めている。

願望を実現するためには，生命をも賭けた行動をとりうるのである。科学的認識で熱狂するのは科学者と少数のものである。この人間性を直視する必要があるだろう。一生を通じて一度も理想に憧がれたこともなく，熱狂的行動をとったこともなく，常に合理的思考のみに基づいて行動する人間がいたとして，果してそのような人間を皆が希望するであろうか？

さてマルクシズムの言う史的唯物論を否定するフロイトは社会発展の動力を何に求めるか？

「おそらく未来は，この実験が時期尚早であったことや，社会秩序の徹底的変化はさまざまの新しい発見によってわれわれの自然支配力が高められ，ひいてはわれわれの欲求の充足が容易になるのでないかぎり，成功の見通しはあまりないということを示すことでしょう。上記のような段階に至った時にはじめて，新しい社会秩序というものが大衆の物質的欠乏を放逐するばかりでなく，また個人の文化的要求も聞き届けるようになるということが可能になってくるのかもしれません。むろんそういう段階に立ち至ってもまだわれわれは，どのような種類の社会的共同体にもついてまわる人間本性の制御のしにくさから生ずるもろもろの困難と，予想もできないほど長く戦わなくてはならないでしょう。」（S.196f.）

マルクシズムでいう「生産力」というものに対してフロイトは「人間の自然力支配」という概念を言う。またマルクシズムがプロレタリア独裁のもとで人間本性が十分社会主義的になりうると考えるのに対して，フロイトは人間本性の制御のしにくさから生ずるもろもろの困難が存在するだろうと言う。この点でフロイトの指摘は歴史的にかなり当っているといえよう。

おわりに

科学的認識はそのまま即価値観なのではない。科学的認識から自動的に価値判断が生じてくるのではない。科学が核エネルギーの存在を探知した

時，原子爆弾を作るかどうかは自動的に科学的認識から生じてくるのではない。これをどう価値づけるか，どう処理するか，ということは全く人間主体に委ねられているのである。或る科学的知識が発見された時，人間主体は理性，感情，感覚，心情，信念，人生観，世界観，欲求，等々といった綜合的条件によって判断し，その知識を価値づけるのである。フロイトは科学的認識に最高の価値を置いている。科学的認識が必然的に正しい価値観を生み出すと信じている。これは科学者なら誰でもおちいりやすい傾向である。しかしここに科学の危険性があるのである。フロイトは明らかに理論信仰におちいっていた。合理主義的思考がフロイトの宗教であったのだ。

さて，フロイトのマルクシズムに対する批判の論拠は次の二点である。第一に，マルクスが経済的条件が人間に与える影響の大きさに着目しこれを強調することに対してはその価値を認めているのだが，人間の心理的因子をマルクシズムは無視しているというものである。また第二には，人間の本性の制御のしにくさを指摘し，社会主義的人間とか共産主義的人間とかいうものはそう簡単に作れるものではないし，マルクシズムのユートピアも幻想性を帯びているというものである。

この二点のフロイトの論拠をほぼ認めるとしても，フロイトのマルクシズム理解にはやはり大きな欠落部分がある。たしかに人間は経済制度の反映体のみであるのでもなければ，また人間の歴史に自然法則と同じ法則があって社会は必然的に共産主義社会に向うという史的唯物論に対する批判も認められる。しかしフロイトがマルクスの後期の思想に留意してこれを批判するのはやはり一面的であろう。下部構造が上部構造を決定するとか，歴史の法則性云々とかいうマルクスの後期の思想こそは，やがて経済主義と唯物主義に堕して，のちのスターリニズムの遠因ともなったのであってこれをもってマルクスの思想を批判できたと思うのは早計である。

マルクスの思想の偉大さは次の点にある。即ち，資本主義社会では「資

本」が主体の地位を占め，「人間」は客体の地位におとしめられている。人間は経済的条件によって自己疎外されている。これを人間が主体の地位につくように逆転せしめなければならない，つまり「人間」を「変革の主体」として把え直し，状況を変革する存在として把握するということである。

マルクシズムの発生はまさに以上の視点に基づいて起きたものであって，これは実に西欧ヒューマニズムの流れに即したものであったのだ。この疎外され無視されたヒューマニズム奪回の運動としてマルクシズムは出発したのである。そしてこの運動のために多くの人間が感動し，熱狂し，自己犠牲を惜しまず戦ってきたのである。この点を見失うマルクシズムの世界観に未来は無い。それは歴史的にほぼ証明されたと言って良いであろう。

フロイトはマルクシズムのスターリニズム性に直面し，それをマルクシズムの世界観と混同したのである。そしてマルクシズムを批判し得たと思ったのである。しかしこの点でフロイトを責めるのは酷というものであろう。マルクシズムの世界観は今まさに論争中なのであって，その決着は歴史が証明すると言うよりほかないであろう。

フロイトが合理主義的認識に絶大な信頼を置いたことは，科学者の立場として当然のことであろう。しかしこれがそのままストレートにすべての人間を包括する世界観にまで高まると考えたことは，やはりフロイトの錯覚であり，単純すぎる考えであろう。フロイトの唱導する科学的世界観も問題を含んでいるのである。無意識の世界，深層心理を開拓し，人々の眼をこの点に向けさせたのはフロイトの大きな功績であるが，フロイトにもやはり限界があったのである。

〔注〕

本論中引用文のテクストには，フロイト全集第15巻（フィッシャー版，1944），Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse，を使用した。引用文末の数字はこのテクストのページ数を示す。なお引用文の訳

文は，新潮文庫，「精神分析入門」下巻，高橋義孝，下坂幸三訳を原則として使用した。

(1982年7月1日受理)

Freud und Weltanschauung

INOKAWA Kiyoshi

Freud beschäftigt sich in seinem Werk „Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse“ unter der Kapitelüberschrift „Über eine Weltanschauung“ mit Weltanschauungen. Darin erörtert Freud die wissenschaftliche, die religiöse und marxistische Weltanschauung. Natürlich verkündet Freud die wissenschaftliche Weltanschauung und kritisiert die anderen beiden Weltanschauungen. Was ist die wissenschaftliche Weltanschauung, die Freud missioniert? Was ist die religiöse Weltanschauung, mit der Freud verfeindet ist? Was ist die marxistische Weltanschauung, der Freud nicht zustimmen kann? In diesem Aufsatz werden diese Fragen behandelt, kritisch betrachtet und geklärt.